

天才少女を育てた或るアメリカの家庭

私は「教育は、本来は家庭のものである」と述べました。零細な家内手工業が、産業革命により、機械工場による大量生産方式に取って換られたやうに、個人的な家庭教育が集団的一斉指導の教育に取って換られたのです。

学校教育は、「教育を専門とする教師が、1人で大勢の子供たちをまとめて一斉に指導できる」といふ点にその特長があります。1人の教師が大勢の子供たちを一斉に指導できるのですから、それは丁度「工場の機械による大量生息」のやうに、その効率には非常に高いものがあります。

しかし、今でも、高級品はやはり職人の手による「家内手工業」に依らなければ出来ないやうに、個性豊かな真に人間らしい人間は、とても学校教育の能くする所ではありません。それは家庭教育の中で初めて育成されるものです。昔の人は「三つ子の魂、百までも」と言ひました。人間の最も大事な基礎は“家庭”で作られるといふことは、昔から広く認められてゐたのです。

平成3年5月29日発行のAERA誌に「ハーバード大学で数学を教へる18歳の少女」といふ記事が掲載されてゐました。その少女の名前

は、ルース・ローレンスと言ひましたが、彼女は12歳でオクスフォード大学の入試に合格して入学し、普通なら3年かかる所を2年在学しただけで卒業したのです。しかも、その成績はトップだったのです。そして、17歳で数学の博士号を取得、アメリカの名門ハーバード大学に迎へられたのです。

彼女は大学に入るまでは、学校といふものには一切行ってゐないのです。すべて家庭で、父親から教育を受けたのです。彼女の父親は、「学校はいろいろな子供が集まってゐて、結局、1人1人の個性を薄めてしまふ所だ」と考へてゐましたので、彼女を学校に行かせずに、自分で教育しようと決心しました。それで勤めをやめて、妻に働きに出てもらひ、自分は“家事”と“教育”とに専念したのです。

彼女の父親は「学校は子供の個性を薄めてしまふ所だ」と言つてゐますが、私は「学校は子供の個性を押しつぶしてしまふ所だ」と言ひたいくらゐです。教師のほとんどが、個性のある、独創性の豊かな子供を受け入れないどころか、ひどく嫌って問題児扱いをするからです。